

[参考事項]

新技術名：多収性水稻品種の生育・収量と成熟期以降の籾水分低下の特徴（平成26年）

研究機関名 秋田県農業試験場作物部作物栽培担当
担当者 三浦一将・佐野広伸 他2名

[要約] 東北地域向けの多収性水稻品種の粗玄米収量は73.5～88.3kg/aである。成熟期後積算気温300℃までは籾水分が50℃あたり1.6%減少するが、それ以降の減少は緩やかである。

[普及対象範囲]

県内全域

[ねらい]

農業政策の転換により、飼料用米作付面積の拡大が見込まれている。飼料用米生産では生産コスト削減が課題であり、成熟期以降に立毛状態で籾を自然乾燥させることで乾燥コストの削減が期待できる。そのため、東北地域向けの多収性水稻品種について、生育特性及び収量性を調査し本県への適応性を検討するとともに、成熟期以降の立毛状態での籾水分の推移を検討する。

[技術の内容・特徴]

1. 成熟期は、標肥区では「べこごのみ」で9月16日、「べこあおば」で9月26日であり、多肥区では各品種とも標肥区より2日遅れた（表1）。
2. 粗玄米収量は73.5～88.3kg/aであった（表1）。
3. 平均気温は10月上旬までは15～20℃で推移し、その後は10～15℃で推移した。10月上旬以降は断続的に降雨があった（図1）。
4. 成熟期以降の籾水分の推移に施肥量の違いによる影響はほぼ見られなかった。最終調査時（10月20日）の籾水分は、「べこごのみ」と「ふくひびき」で約17%、「みなゆたか」と「べこあおば」で約19%であった（図2）。
5. 成熟期後積算気温300℃までの籾水分は50℃あたり1.6%減少したが、それ以降の減少は緩やかであった。

[成果の活用上の留意点]

1. 試験は2104年に大仙市神宮寺で行った（移植：5月26日、栽植密度：18.3株/m²）。
2. 基肥は標肥区でN:P₂O₅:K₂O各0.5kg/a、多肥区でN:P₂O₅:K₂O各0.7kg/a施用し、追肥は両区とも幼穂形成期及び減数分裂期に各N 0.2kg/a施用した。
3. 籾水分は、12:30～17:00にサンプリングした籾をKett社製ライスタmにより測定した。

[具体的なデータ等]

表1 主要成果の具体的な数値

区	品種	出穂期	成熟期	稈長	穂長	倒伏	穂数	総粒数	粗玄米収量	増収比
		月/日	月/日	cm	cm	(0-5)	本/m ²	千粒/m ²	kg/a	(多肥区/標肥区)
標肥区	べこごのみ	7/25	9/16	74.0	18.9	0.0	264	34.0	73.5	100
	みなゆたか	7/29	9/21	85.4	16.2	0.0	401	34.5	77.9	100
	ふくひびき	8/2	9/20	73.8	18.8	0.0	391	33.3	80.5	100
	べこあおば	8/7	9/26	75.6	18.4	0.0	379	34.3	83.3	100
多肥区	べこごのみ	7/25	9/18	77.7	20.0	0.0	330	42.5	74.6	102
	みなゆたか	7/29	9/23	87.3	17.6	0.0	450	40.1	79.1	102
	ふくひびき	8/3	9/22	76.1	19.9	0.0	436	39.3	86.4	107
	べこあおば	8/7	9/28	71.8	19.4	0.0	325	27.9	88.3	106

*周辺圃場のあきたこまちの成熟期は9月20日前後。

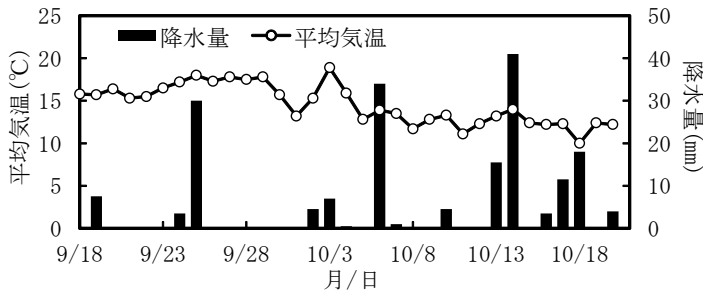


図1. 成熟期以降の気温と降水量（大曲アメダスデータポイント）

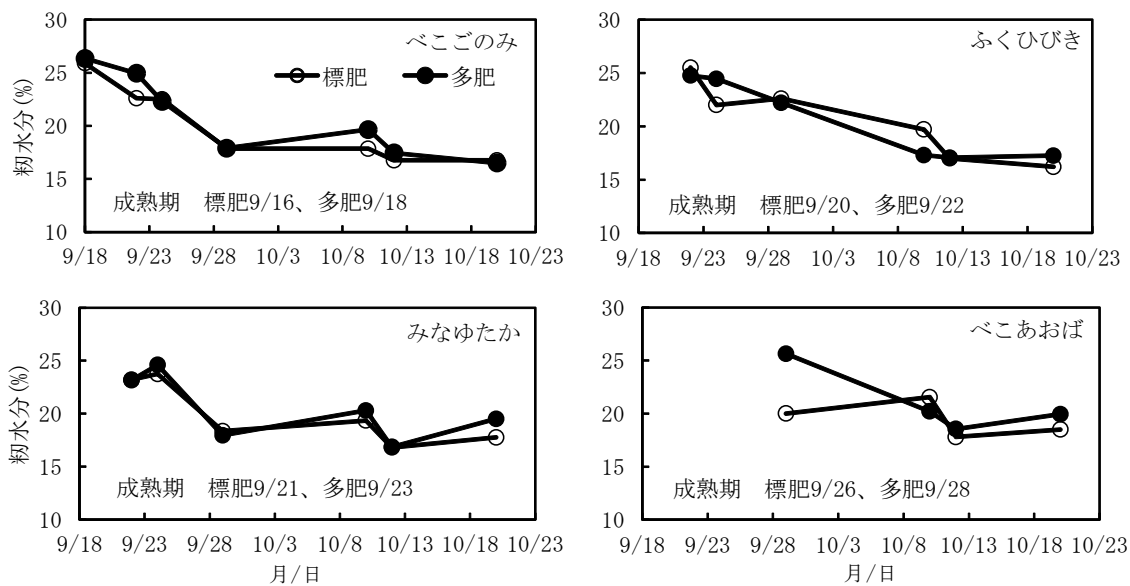


図2. 成熟期以降の澱水分の推移

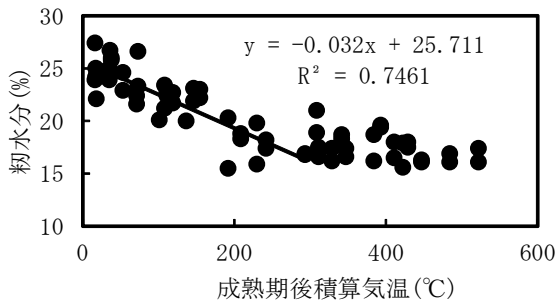


図3. 成熟期後積算気温と澱水分の関係

[発表論文等]

飼料用米栽培マニュアル作成に活用。